



令和元年度

ウッドシティ
TOKYOモデル
建築賞
受賞作品集



ウッドシティ TOKYOモデル 建築賞について

概要

東京都では、木材の大消費地・東京において、新たな木材需要を喚起することで、多摩地域をはじめ全国の森林循環を促進し、林業・木材産業の成長を図ることを目指しています。この度、大都市東京において木材利用の新たな可能性を開拓する革新的・モデル的な建築物又は木質空間を表彰するコンクールを実施しました。

応募対象

- ・東京都内に所在すること。
- ・公開可能な非住宅の施設であること。
- ・構造材や内装材などの全部又は主要な部分に国産材を使用していること。
- ・直近5年以内（平成26年4月1日から募集開始の前日まで）に竣工した木造及び混構造建築物、又は直近5年以内に木質化した空間。
- ・建築基準法等各関係法令を遵守していること。
- ・同一の建築コンクール等において、知事賞や大臣賞の受賞歴がないこと。

審査における着眼点

- ・国産材の特徴や良さを活かし、有効活用しているもの
- ・先進的な木材利用の普及に寄与するもの
- ・都市部における建築物の木造化、木質化への波及に寄与するもの
- ・建築物又は木質空間として優れたデザインであるもの
- ・建築等の過程において女性が活躍したもの
（女性活躍賞のみの着眼点）

表彰

優秀作品については、東京都知事賞（最優秀賞：1点・優秀賞：2点・女性活躍賞：1点）、産業労働局長賞（奨励賞：6点）を贈呈しました。
P3より紹介します。

審査経過

- ・令和元年7月1日～8月31日 作品募集
- ・令和元年10月24日 審査
- ・令和元年12月10日 表彰式
（WOODコレクション（モクコレ）令和元年開会セレモニーにて）

審査委員（五十音順）

- ・秋山 延江 氏
（一般社団法人日本インテリアコーディネーター協会 副会長）
- ・多幾山 法子 氏
（首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域 准教授）
- ・原田 真宏 氏
（株式会社マウントフジアーキテクトスタジオ一級建築士事務所 主宰建築家、芝浦工業大学建築学部建築学科 教授）
- ・古谷 誠章 氏
（早稲田大学創造理工学部建築学科 教授）
- ・東京都産業労働局 農林水産部長

ウッドシティTOKYOモデル建築賞 受賞作品集

目次——CONTENTS

最優秀賞

01 やなぎこうじ みなみかど 柳小路南角 4

優秀賞

02 神田明神文化交流館 EDOCCO 6

03 日野わかくさ幼稚園 8

女性活躍賞・奨励賞

04 TOKIO MARINE CAREER DEVELOPMENT CENTER 10

奨励賞

05 Gビル 自由が丘01 B館 12

06 神宮前3丁目プロジェクト (allée de JINGUMAE) 14

07 水天宮御造替 16

08 MIRAI LIVELY HOUSE 18

09 明治神宮CAFÉ「杜のテラス」 20

受賞作品所在地情報 22



※受賞作品ページ掲載の図面中の縮尺表示について
 一部の図面中にある縮尺表記は受賞者から提供された図面原本のものです。
 図面原本を本誌のサイズに合わせ縮小など行いレイアウトしていますので、誌面上で縮尺は正確ではありません。



2階の構造体



1階の構造体。高さ2mの独立基礎に木の柱が載る。床はRC造。打設計画に工夫を要した。



木構造の上棟時の様子。木同士が「貫」のようにぶつかる力強さやそこらに生じる安心感を重視した。



燃えしろ設計による1時間準耐火

ラフ材をビスで合体させた「重ね梁」

耐火試験で燃えしろ60mmをクリア

曲げ試験を実施、構造評定を取得



東京・二子玉川の路地の入り組んだエリアに建つ。もとの街割に倣い各階3店舗とした。

01

最優秀賞

やなぎこうじみなみかど

柳小路南角

受賞者

設計者 三井嶺建築設計事務所

設計者 坂田涼太郎構造設計事務所

東京・二子玉川におけるテナントビルの計画。「柳小路」と呼ばれる路地の入り組んだエリアにある。クライアントの要望は、ショッピングセンターにはない街場感を作り、新築に見えないように最初から街に馴染むこと。しかし現代的に。

この難題を解くために、「木」を使うことで、建物に「温もり」を与えることにした。

木造はプレーナー処理前の製材を束ねた、前例のない柱と梁の構成。荒々しくも柔らかい木の質感と量感、梁が柱を貫く「貫」の力強い接合部が、安心感と居心地の良さを作り出す。

元請の施工者決定に先立ち、木造部分については福島県の木材加工・施工会社である株式会社オノツカと加工方法・建方・コストコントロールについて綿密なやり取りをした。同じ福島県の木材供給事業者より福島県の木材を仕入れることで、産地から工場間の輸送エネルギーの削減を可能とし、依然として被災から復興の半ばである福島県の産業を利用することも意識した。

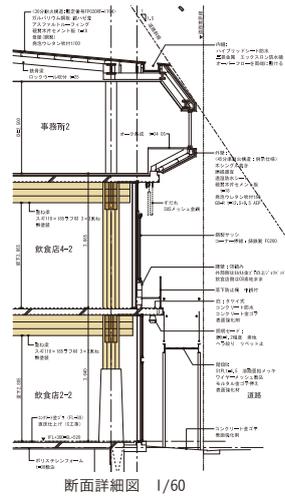
なお、商業施設のため、コンクリート床を要求された。床が重く、地震時の水平力が大きい場合、無理に木造にこだわると耐力壁だらけとなり閉じた空間になってしまう。商業施設にふさわしく外部にも木架構を見せるオープンな建物とするため、鉛直荷重に対しては木架構、水平力に対してはRC架構が負担する平面混構造を採用した。

効果的に木造を採用することで、ショッピングセンターにはない街場感が生まれた。木造とRC造を適所適材で用いる参考事例になることを目指した。

集成材を用いず、一般流通材のプレーナー処理前の製材を束ねた柱と梁。前例のない構造の試み。

RCスラブを木の柱・梁で支える

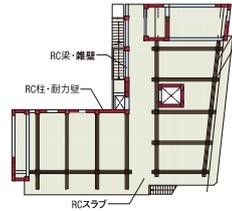
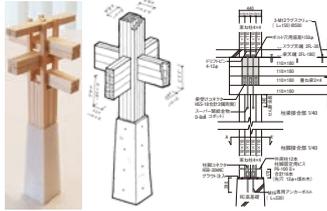
1-2階は木造とRC造の混構造で、木造は鉛直力を負担。重ね梁の上に型枠を組み、RCスラブを打ち込んだ。



断面詳細図 1/60

3列×4段の重ね梁が柱を貫く

柱は110角、梁は110×180の杉材を束ねた。機械等級区分のE70とし、杉材として無理のない強度とした。

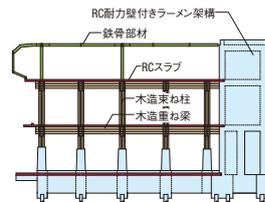
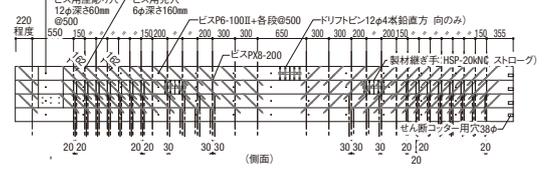


RC架構をバランスよく

1階構造見上げ図。L字を描く平面の中で、RC造の柱や耐震壁は、偏心を避けるとともに、平面の両端や、前面道路とは反対側の奥に位置している。

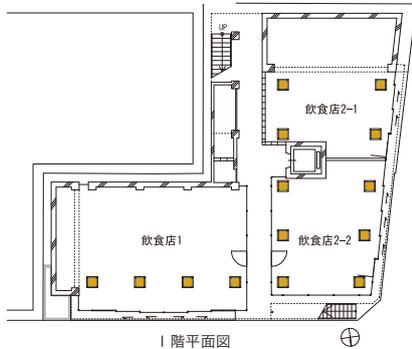
斜め打ちのビスで重ね梁を製作

長ビスを斜めに打ち込んで上下を接合。ビスのピッチを応力に合わせて変えている。木材は、加工・施工会社と供給者を共に福島県の企業とすることで、産地から工場間の輸送エネルギーの削減を可能とした。

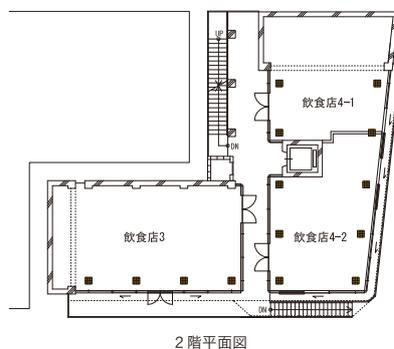


ファサード側に木造加工

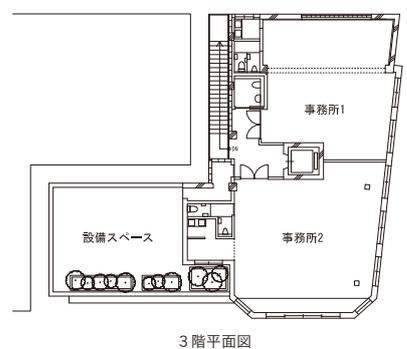
軸組み図。RCの耐震壁は、前面道路とは反対側に配置しているので、道路側のファサードに面して、木造の束ね柱や重ね梁の架構が連なる。



1階平面図



2階平面図



3階平面図

「柳小路南角」を構成するエレメント



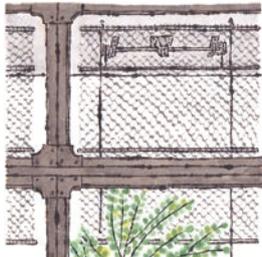
レッドシダーのシングル葺きの3階外壁 外装と植栽



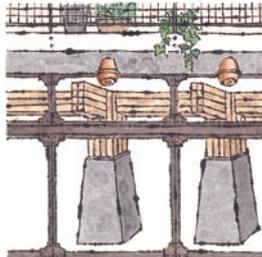
店内に入り込む土木のスケール



梁が柱を貫く力強い接合部



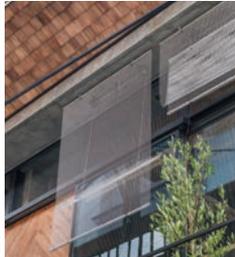
铸铁製建具と金属製すだれ



巨大なコンクリート独立基礎



木造を内装で生かす

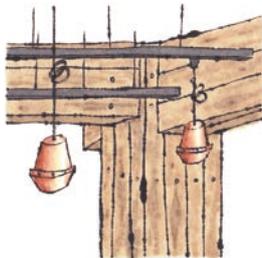


金属製すだれによるシェード

受賞概要・講評

東京都世田谷区玉川に所在する、プレーナー処理前の細い柱を結合し大断面の構造材として活用した混構造建築のテナントビル。福島県の供給事業者より調達した国産の杉材を活用し、梁が柱を貫く「貫」の力強い接合部が特徴となっている。

本作品については、大規模建築ながら集成材を用いず、一般流通材の製材を重ねてビスで固定し、大きな柱・梁として活用されたチャレンジ性、またプレーナー処理前の製材により生まれる木造ならではの独特なコラージュ感等が評価された。



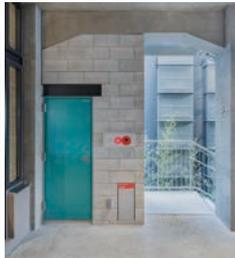
銅シェードと木柱



丸いコーナーの铸铁製建具



少しずつ折れ曲がる共用路地



改修を意識した多重人格の設計



可動間仕切とサッシを開け放つことで、ホールとホワイエ、境目が一体化する

02

優秀賞 神田明神文化交流館 EDOCCO

受賞者

施主 宗教法人 神田神社
 設計者 鹿島建設株式会社建築設計本部
 施工者 鹿島建設株式会社東京建築支店

本計画は神田明神の創建千三百年の記念事業として、参拝者や観光客、さらに外国からの来訪者に日本の伝統文化を伝えることを目的とし計画された。1階に神札授与所やカフェ・物販店舗、2-3階にライブなどのパフォーマンスが観られる多目的ホール、4階に貴賓室、地下1階には日本文化の体験スペースからなる、地下1階、地上4階の複合施設である。各フロアには様々なアート作品が配され、連綿と受け継がれてきた歴史の継承のみならず、多様な価値観を受け入れ、新たな文化を創出する交流の場を創りだしている。

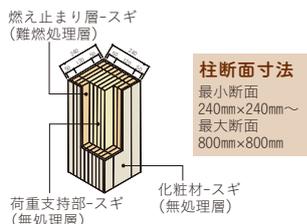
「伝統と革新」というコンセプトのもと、その時々を伝える姿として、建築自体が主張するのではなく、力強い木フレームや木質化された空間越しに、その時代の文化やアクティビティが境内へと染み出すファサードとした。現在の御社殿は、関東大震災による倒壊を機に、築地本願寺の設計などで知られる伊東忠太の設計監督により、鉄骨鉄筋コンクリートという当時の先端技術が採用されている。革新を積極的に受け入れてきた伝統と精神に応えるために、文化交流館には現代の先端技術である耐火木造が採用された。

周辺地域に面する外装には、鎮守の柱の木々の揺らぎや、重なりを表現したプレキャストコンクリートの外装、ホール内装は、随神門の赤と黒、肘木の持ち出しをイメージさせる木製ルーバーなど神田明神らしさを表現した。

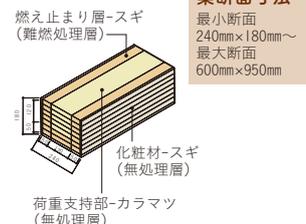
都市への木づかい

純木質耐火集成材の採用

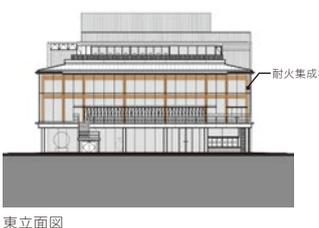
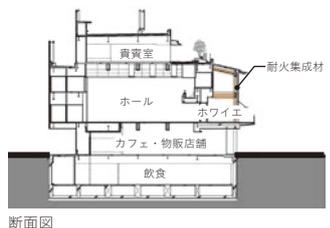
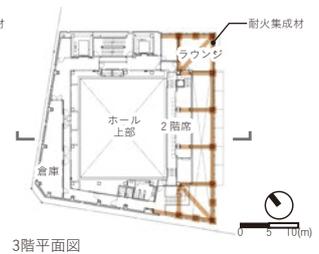
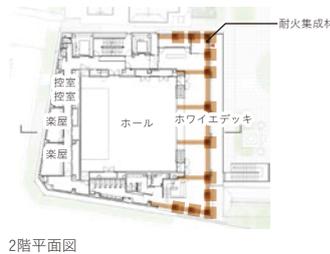
柱



梁



構造部材には純木質耐火集成材を採用。荷重支持部を特殊な薬剤を染み込ませた燃え止まり層で覆うことで、火災時の熱が伝達することを防ぎ、石膏ボードなどの不燃材を用いることなく優れた耐火性能を発揮する。



森と都市と人を繋ぐ

東京・多摩産材の活用

参拝客が気軽に立ち寄れる1階カフェ・物販店舗の什器、2-3階ホワイエの柱・梁に使用する木材の大部分は、神田神社が祀る平将門公と縁が深い多摩地区のスギ材を使用。森・都市・人をつなぐ場を創りだしている。



1階 カフェ・物販店舗



鎮守の柱に抱かれた境内をイメージさせるホール



2019年元旦の様子。神田神社には三ヶ日で約30万人が訪れる



技を現代へ繋ぐ

仕口加工・建方技術の応用

東京の木・多摩産材の活用について

神田明神の御祭神である将門様ゆかりの地が東京の多摩エリアとのいわれがあり、そのご縁もあることから本施設では多摩産材を積極的に活用し、東京の森林の適切な循環に貢献しています。

登り梁と2方向からの梁が鋭角に交わる南東角、柱と梁を交互に建て逃げてゆく建方などの難易度の高い工事には、木造文化が育んだ知恵と経験が応用された。多摩産材の利用拡大、東京の森の適切な維持管理・循環利用に寄与していることを明示し、多数の来訪者への情報発信と地域材に触れる機会の創出を図っている。



ホワイエとホールが境界なく一体的に使われる



木フレームが建築の構えを顕在化する

受賞概要・講評

東京都千代田区外神田に所在しており、神田明神創建千三百年の記念事業として日本の伝統文化を伝えることを目的とし建設された。東京都の多摩産材が内装材、構造材等様々な箇所に活用されており、また構造部分には純木質耐火集成材を使用している。

本作品については、多くの来場者がある史的な施設において、燃え止まり層として難燃処理木材を使い耐火木造とした点、また社殿とのバランス感や対比の美しさ、昼夜で変わる建物の表情等が評価された。